

故木之下晃さん提唱 市井のお年寄りを写した「寿齡讃歌」展

その美しく味わい深き表情

「人生のマエストロ」へ温かいまなざし



2009年、「寿齡讃歌」展の会場で作品について語るありし日の木之下晃さん＝いずれも長野県茅野市で

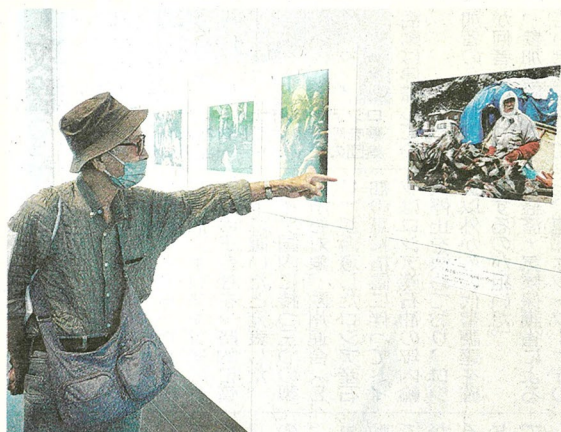
長野県茅野市の茅野市美術館で、お年寄りを撮影した写真展「寿齡讃歌」が開かれている。音楽写真の大家だった故木之下晃さんの提唱で始まり、今年で十七回目。二〇一五年に木之下さんが七十八歳で亡くなった後もその遺志を継いで続く。

キュウリを種から育てる名人の九十五歳の女性。施設に入所する日の朝、不安そうなお年寄りの百二歳の女性。同県の奈良井宿で愛犬と二休みする八十六歳の男性。撮影の一月後、笑顔のまま穏やかに他界したという九十三歳の女性。市井の人の一度きりの人生が家族や知人らによって写され、鑑賞する人に「生きる」との意味を問うこの写真展。今回は地元の茅野市をはじめ、全国の九十九人から出品があり、その全てが会場に展示されている。撮影する側にも高齢者

が多く、写真撮影の技量とは関係なしに味わいの深い作品が多い。

故木之下さんは、世界の巨匠（マエストロ）から若手まで、多くの音楽家を撮影し続けた。被写体となった人たちの本質に迫ろうとする撮影哲学の持ち主であり、そうした思想の表れの一つがこの写真展。お年寄りを「人生のマエストロ」として、その姿を写した写真、プロの作品もアマチュアの作品もみな公平に展示する企画なのだ。

一三年、木之下さんが本



「寿齡讃歌」展の会場で、青森の漁村の女性を撮影した作品について語る英伸三さん

紙に連載した随筆「音楽写真の夢」では、この催しの持つ意義が、こんなふうに語られていた。

「被写体となったお年寄りへの温かい敬意を感じさせる写真、カメラを向けられたお年寄りがはにかみつつ喜ぶ表情を写し取った写真には、プロもアマも関係がない」と。至言であろう。

その没後は新たに、写真家として現代写真研究所の英伸三所長を講師に迎え、引き続き開かれている。一九三六年の生まれで、八十六歳になる今年まで長年、時代の激しい移り変わりの中を生き抜く日本や中国の人たちと、街や村、自然の姿を

撮り続けてきた大家だ。

本展に寄せた談話で「見る側に感動を与える作品は、被写体に深く心を寄せ、細かく行動を観察することから生まれる」とする英さん。作品の一つ一つに英さんの講評が寄せられ、出品者の励みになっているという。

あいにくコロナ禍のために、今回も開会式は開けなかった。だが初日から出品者をはじめ、多くの人たちが会場を訪れた。この記事を讀んだ方も、来年はどうかふるって応募を。

ちなみに記者自身が最も目を奪われた写真は、青森の漁村で働く八十歳の女性を写したものだ。この地を十年余りも撮影してきたという地元の写真家の作品で「珍しく声をかけられ撮った」との説明がある。

その題名は「わば撮ってけー」。私を撮ってください、という方言だ。大量の魚を前に、缶コーヒードヒと息入れている情景である。服についた魚の血が、この人は働き者なのだ、確かに物語る。（三品信）

「寿齡讃歌」展は25日まで（20日は休館）。午前10時から午後6時。観覧無料。問い合わせは茅野市美術館。電話0266（82）8222へ。